

【県議インタビュー後の学生レポート】

公共政策学科 4年 松田あすか、濱崎輝

公共政策学科 3年 井出翔馬

公共政策学科 2年 島田鴻慈

公共政策学科 1年 下田真宗

今回、オールながさきの宮島大典議員と改革21の赤木幸仁議員、自由民主党の北村貴寿議員、千住良治議員、日本共産党の堀江ひとみ議員、公明党の宮本法広議員にインタビューを行った。以下インタビュー内容である。

(所属会派は令和3年12月6日時点)。

(1) 宮島大典議員(オールながさき)

長崎県議会議員(通算2期)、衆議院議員(2期)、防衛大臣政務官(野田第3次改造内閣)、民主党副幹事長などを歴任。

問1：政治家を志したきっかけは何ですか？

学生時代は政治には興味が無く、政治家になろうとは全く思っていなかった。20歳の頃に父が国会議員になり、国会の事務所を手伝うようになった。その当時、日本はまだバブル時代で勢いもあったが、そのなかでも色々な方が陳情にみえて相談をされていた。陳情される方はやはり社会的立場が弱い方が多く、そのような方と接するうちに政治は面白い仕事だと感じるようになった。また、永田町という政治の中核で社会が動いていることを見て、政治のダイナミズムを目の当たりにしたことも政治を面白いと感じたきっかけである。

たまたま地元に戻ってきた際に地方議員に出ないかと立候補を要請され、どうせやるのなら年齢の若いうちからが良いだろうと思い立候補した。幸いにも当選することができた。

問2：国会議員と県議会議員の両方を経験して感じた違い・ギャップは何ですか？

国会議員はまさに国政に関すること(国家予算のチェックなど)が仕事であるのに対して、地方議員は地方の様々な身近なことを解決していく仕事である。ただ、予算などを見ると地方は予算の約7割が国からくるのでどうしても国の意向が強くなってしまい、また補助金に関しても中央省庁が「〇〇をしてくれたら補助金をあげる」というスタイルであるため、中央が力を持っているということは感じた。地方を変えるためには、まず中央を変えなければならないと思い、国会議員に挑戦した。

感じたギャップは、国会は議院内閣制であり、議員の中から総理大臣を選ぶというスタイルであるのに対して、地方の場合、知事は直接選挙で選ばれており、我々地方議員は国会議員とは違って予算のチェックや提案において権限が小さいということである。予算や政策などの執行権者の方が力を持っているのでこのような点が地方議員と違う部分であると感じた。

問3：統合型リゾート（IR）と長崎の観光についてのお考えをお聞かせください。

① IRは交流人口を増やす1つのアイテムである

IRは世界各地で展開されており、いまや世界標準の観光施設となっている。

日本はこれからも人口が減っていくと予測されているので、それを補うために交流人口を増やさなければならない。交流人口（特に外国人）を増やす1つのアイテムとしてIRがある。

② IRを長崎県や九州にどう活かし広げていくかが重要

IRは事業費約3,500億円という大規模な事業であるが、自分の感覚からすれば、観光の中の1つのアイテムとして考えており、そのような意味では過剰に期待してもいけないし、IRをどう活かして、長崎県や九州に広げていくのかという方が重要である。

ハウステンボスは私が県議会議員になる前年の平成2年にできたが、一度経営難に陥り頓挫してしまった。その時もハウステンボスが長崎県内の観光に波及しなかったのではないかと考えている（もちろん、ハウステンボスができることで長崎に来たという観光客も一定数はいたと思う）。長崎は教会やカステラなどに頼った昔ながらの観光から脱却できず、新しい魅力を創ってこなかった。佐世保も、観光客はハウステンボスにはくるとは佐世保市街にまではあまりこなかった。このような点が一番の問題であり、同じことを繰り返さないようにどうやって波及効果をつくっていくかが重要となってくる。

そのためには長崎県全体の観光の底上げをする必要があるだろう。例えば、佐世保市の俵ヶ浦半島にできた観光公園の場合は、観光公園だけが盛り上がりすぎてしまうとそこに訪れて終わりになってしまうため、自然が豊かという俵ヶ浦半島の強みを生かしてそれを楽しめる仕掛けができないかと考えている（イメージとしては福岡の糸島のような自然を生かした観光公園化をしたい）。

ハウステンボスに来た人が俵ヶ浦半島へ行く、そして平戸へ行くといったような拠点づくりをもっと整備していく必要がある。

③ IRに期待すること・要望など

もちろんIRには期待しているが、特に小さい子供からお年寄りまで楽しめるようなエンターテインメントを仕掛けてほしい。また、IR内に「ジャパンハウス」というアニメや歌舞伎など日本ならではのコンテンツを扱う、外国人向けの施設建設が計画されているがそれだけでは物足りない印象がある。

問4：若者の雇用増加と県内就職の促進についてのお考えをお聞かせください。

① 発想の転換をすべき

地方でも全国・世界を含めた仕事ができると認識すべきである。大学の同窓会にて佐世保で食料品メーカーの社長をされている方とお話をした際に、その会社が全世界に展開している「一風堂」の麺を製造しているということを知り、驚いた。また、その社長は「流通の仕組みがしっかりしていれば東京にいなくても仕事ができる」とも言われ、納得した。そのきっかけになるのは今回の新型コロナウイルス感染症拡大であり、コロナ禍によりリモー

トワークやテレワーク、ワーケーションが進み、中央でなくても仕事ができるようになって
いる。

② 長崎県は災害リスクが低いという強みを活かすべき

日本は災害リスク、特に震災リスクが高く、南海トラフが起きれば日本は壊滅的な被害を
受ける恐れがある。これに備えて、国会の機能は移転できなくとも経済の機能は分散させて
いく必要がある。この点において長崎県は震災リスクが低く、近年は台風の進路も本州の方
に逸れていくようになり、今後より魅力的な地域になっていくのではないだろうか。

あとは行政がどのように民間と組んで地域おこしをやっていくのかが重要である。その
なかで若者の雇用をつくったり、若者がスタートアップ（起業）したりできるように、行政
は金融機関とも組んで全面的にバックアップしていき、どんどん芽を伸ばしていくという
やり方で若者の地元定着を図る必要がある。自分も大学は東京の大学に通った経験がある
ため、「長崎から出るな」と言うよりは、一度外に出てみて世の中を見てからでも長崎に戻
って来れるようにしていくのがいいのではないだろうか。若者が魅力を感じてUターン・Iタ
ーンをしてくれるような受け皿を整備すべきであると思っており、長崎はこれからが勝負
である。

問5：増加する外国人住民・労働者との多文化共生についてのお考えをお聞かせください。

自分は佐世保育ちで、もともと外国人に対する違和感は全くなかった。佐世保はアメリカ
との交流の街であり、長崎も中国やオランダとの交流があり国際色豊かな街であることは
間違いない。そういう意味では長崎はアジアのゲートウェイだとよく言われているが、確か
に日本の中では西の端である一方でアジアには一番近い。そういう地理的優位性を活かし
て長崎がアジアのゲートウェイ、日本での窓口、新しい形での出島になれば面白いのでは
ないか。中国との関係など先行き不透明な要素はあるが、しかし、その一方で東南アジアを
含め、世界には非常に伸びている国々があり、そういった国との交流は進めていくべきで
ある。

(2) 赤木幸仁議員(改革21)

長崎県議会議員（通算1期）、長崎県議会新型コロナウイルス感染症対策・経済対策特別
委員として活動中。

問1：政治家を志したきっかけは何ですか？

大学生の頃から一人でも多くの人を幸せにできたら良いなと思っていた。心理学を学び
たいと思い東京学芸大学に進学した。大学では老人福祉施設や障がい者福祉施設などの研
修があり、その中でも特に児童養護施設が印象に残っている。さまざまな事情で両親と一緒
に暮らせない子どもたちがたくさんおり、背景には貧困などの社会問題があることがわか
った。このような問題を政治によって解決できないか考えるようになった。また、長崎西高
校出身で、東京に行ったからこそ外から長崎を見て地元の魅力がわかった。要するに、大学

で心理学を学んだこと、外から長崎を見た経験が政治家を志すきっかけになった。

議員の仕事は市民の声を行政に届けることである。困っていることを政治によって変えることができたなら市民の皆さまに喜んでもらえる。すべてを変えられるわけではないので葛藤を感じることはたくさんあるが、笑顔を見ることができたときはやりがいを感じる。

問2：新幹線（九州新幹線西九州ルート）と今後の長崎の観光についてのお考えをお聞かせください。

関西から来るにしても博多での乗り換えなど心理的負担が大きいように感じてしまう。そのため、関西から観光客を呼び込むのは難しいと思っている。だからこそ、他の公共交通とどのようにつなげていくのかも課題である。

ただ、新幹線によって長崎と佐賀の関係性が深まったように感じている。ルートの中で長崎や佐賀の魅力をどのように発信していくのか考えていきたい。

問3：若者の雇用増加と県内就職の促進についてのお考えをお聞かせください。

長崎県としては、県内就職応援サイトである「Nなび」の運営などを行い県内就職の促進を行っている。若い人からすると都会の方が、職種が多く給料も高いというイメージがあると思うが、手取りの給料は長崎に就職した方が高い（＝給料は安いかもしれないが、都会に比べて物価が安いから）。そのことをわかってもらえたらと思っている。

また、一度都会に出ても長崎に戻ってきたくなるような環境をつくることも大切にしたい。長崎は自己実現できる場であり、チャレンジできる場でもあることをアピールすることが必要だと思っている。

問4：長崎からの平和発信や被爆体験の継承についてのお考えをお聞かせください。

被ばく者や戦争体験者の高齢化が問題になっていることから、生の声をどのように継承していくのか考える必要があると思っている。「長崎アーカイブ」も継承する上では重要な取り組みである。「長崎アーカイブ」は地図上に被ばく体験を継承することで体験談と場所を関連づけ可視化できるように工夫している。

ただ、平和は悲惨なエピソードだけではないと思っている。平和をどのように創っていくのかという観点からも長崎から発信していくべきだと思っている。

(3) 北村貴寿議員（自由民主党）

長崎大学大学院経済学研究科経営学修士。大村市議会議員を2期務め、2019年長崎県議会議員選に当選。

問1：With/Afterコロナの観光についてのお考えをお聞かせください。

これから長崎市を中心として観光業は盛り上がりを見せていくだろう。しかし、COVID-19が無かった時代には戻れない。COVID-19は、これからインフルエンザのような存在にな

っていくものの、人々の生活様式を変え、清潔意識を引き上げた。観光も元の戦略ではなく他のアプローチ、具体的には、旬が存在する自然観光に重きを置くのではなく、通年恒常的に楽しめる博物館や美術館など、長崎特有の「文化」「歴史」で売り出すことを考えた方が良いのではないか。

問2：大村市など人口増加傾向にあるが、減少抑制の秘訣は何ですか？

大村市は平地が多く都市計画や土地開発に制限がかからないため地価が安く、団塊ジュニア世代が家を手に入れたがること、また、交通が便利な土地であること、競艇による収入もあって福祉が充実していると思われることが主な要因である。増加傾向とはいえ、県内からの移住がほとんどであり、県外からも呼び込める土地にしていかなければならない。

問3：増加する外国人住民や外国人労働者との多文化共生についてのお考えをお聞かせください。

人口減少は地方だけでなく国全体で抱える問題となった。これから経済が発展できるか否かは、移民を受け入れるか否かという問題に直結する。自国の文化は大切だが、かといってそこに固執してしまうと、人口減少に歯止めがかからず世界からも置いて行かれてしまうおそれがある。

日本の長所は、「安全」「高給」である。長崎には、いち早く移民を受け入れるためそこに「対応できる言語の幅広さ」「住みやすさ」を加えたい。みな違って当たり前、違いながらに打ち解けて、融合するのが良いと考えている。

(4) 堀江ひとみ議員（日本共産党）

日本共産党県副委員長、長崎市議会議員を4期連続で当選し、その後2007年から県議会議員を務める。

問1：新幹線（九州新幹線西九州ルート）と今後の長崎の観光についてのお考えをお聞かせください。

長崎新幹線は県内移動のための新たな足ではなく、県外との連絡路的な性格を持つ。巨額の資金を投じているが、県内の移動に対する効果は薄い。県民の暮らしをより便利に、そして県内を巡りやすくするには、長崎新幹線よりも、既存の公共交通機関を強化、拡充、連携させる方が良いのではないか。また、公共機関の充実によって、一つの目的地へ行くのにより多くの選択肢が生まれ、観光資源を増やすこともできるのではないか。

問2：高齢者福祉・子育て環境の促進についてのお考えをお聞かせください。

子どもの医療費が低いところには人は来る。児童福祉の個人負担をどれだけ減らせるかが重要になる。また、高齢者福祉は小さく、多くつくるのが現在の主流であるが、施設の充実よりも福祉を充実させることが人口減少を食い止められると考えている。

長崎県は恵まれた自然環境を武器に「終の棲家」、人生の終わりの地として人気を得ると

いう選択肢もある。

問3：長崎からの平和の発信、原爆被ばく体験の継承の在り方についてのお考えをお聞かせください。

原爆投下から既に70年以上が経過し、被ばく者の数も確実に減少している。録画してアーカイブに残したり、被ばく経験のない語り部を育成したりすることで、引き続き継承するという方針である。長崎市は8月9日が登校日であるが、他市町はその限りではない。これを長崎県全体で8月9日を登校日として、生徒に原爆投下という事象について考えてもらう機会を作りたいとも考えている。

長崎は広島と違い、被ばく者の認定制度が不十分である。全ての被ばく者が亡くなってしまいう前に、被ばく者認定制度を充実させる必要がある。唯一の被ばく国、たった二つの実戦で原爆が使われた土地のひとつとして、国内および国際社会に核兵器の凄惨さを伝える必要性はこれから先も重要であり続ける。

その他：覚えておいてほしいこと

議員というのは特別な仕事ではない。数ある職業の中で、「住民の意見を代表する」という職業があるだけである。行動力、意思、そして住民の声を聴く力を媒介に社会を改善し、皆が暮らしやすい環境を整えるのが仕事である。政治は主権者たる国民、住民が行うものであり、議員はその受け皿に過ぎない。最も重要なのは、「自分の意見を持つこと」である。さまざまなことを調べ、存在する問題に対して自分なりの答えを持つことが重要なのだと考えている。

(5) 宮本法広議員（公明党）

薬剤師として3年間病院勤務、17年間佐世保市内の調剤薬局勤務を経て、2015年に県議会議員に当選（佐世保市・北松浦郡）。現在、公明党長崎県本部青年局長。

問1：なぜ、薬剤師から議員を志したのかを教えてください。

実は最初は自分で決めた訳ではなく、出してくれと頼まれました。また、我々の党には珍しく、一定の年齢をこえると出馬できず、若い人にバトンタッチする定年制という制度があり、私にもお声がかかったという訳です。薬剤師は自分にとって天職だと感じていたので、辞めたくはなかったのですが、薬剤師と議員は全く違う分野であるものの、人を助けるためになる仕事という点では共通していたので、一大決心して承ったというのが経緯です。

また、薬剤師としての経験が活かしたのは、コミュニケーション能力です。傾聴という姿勢を大事にしなが議員活動をしてきました。議員は市民の困りごとを聞いて、その解決策を形にする職業です。それが薬剤師のときから身につけていたので、コミュニケーション能力の部分が一番大きいのではないかと思います。医療業界にいたので、いろんな方の健康状態の管理をさせていただいて、その悩みも聞いていました。体力のつけ方、介護・看護、薬物治療などを必要としている人がたくさんいました。そこで僕の仕事は、薬剤師という小さな

範囲に留まらず、もっと大きな範囲で活躍することだと自分に言い聞かせて勤めています。

問2：長崎県のプロチームとして、V・ファーレン長崎といったプロサッカーチームがありますが、議員としてのスポーツ振興へのかかわり、お仕事について教えてください。

プロチームとして、V・ファーレン長崎がありますが、V・ファーレンを応援しよう、試合を見に行こう、という懇話会を長崎県議会にも設ける取り組みをおこなっています。選手達と具体的なかかわりというのはまだ薄いのですが、周りの環境整備といったところに尽力しています。例えば、財政的支援に加えて、大会の誘致に向けてのCMの制作や、駅から試合会場までのアクセスの改善、スタジアムを建てる際の許可などを併せてかかわらせていただいております。

問3：医療面から見た長崎県のIターン・Uターン政策の利点はどう思われますか。

長崎県は病院数が多いと感じることはあるのですが、地域によっては非常に厳しい現状にあります。例えば、平戸においては医療機関が不足しています。長崎市などの都市部においては病院数が充実しているとは思いますが、やはり県北や離島などの医療体制はひっ迫しています。働く場所や住む場所より優先順位は落ちるかもしれませんが、Iターン・Uターンの政策を進めるには、医療体制の充実は必要不可欠です。「地域包括ケアシステム」という言葉があるのですが、それを構築するためにも、住んでいる地域で医療、介護、福祉のサービスを受けられる体制を構築することが大事だと思っています。その体制をつくることで、Iターン・Uターンの政策もより魅力的に見えると思います。

問4：佐世保市には米軍基地があり、県内他地域より独自のアメリカ文化が根付いています。議員はこのアメリカ文化が根付く佐世保の特色についてどう思いますか。

これは佐世保市の特徴です。昔から佐世保は軍港の街として栄えていて、海軍がきたことで佐世保の歴史が始まり、いろいろな人たちが集まってきた街です。そのときの中心だったのが海軍です。米軍基地があることで防衛の街として共存共栄してきました。もちろん反対の声もありましたが、アメリカ文化というのは古くから佐世保にあって、道を通れば、普通に外国人がいる感じですね。米軍たればこそ、共存共栄の街だからこそできるのであって、それはかけがえのないものであると思います。米軍には大学がありますよね。その大学と佐世保の大学が連携したり、佐世保市民であればその大学に留学できたりするなど、幅広い英語教育を進める取り組みがあれば、もっといいなと思います。

(6) 千住良治議員（自由民主党・県民会議）

元諫早市議、2021年3月に長崎県議補選（諫早市区）にて県議に当選。長崎県議会文教厚生委員会委員、観光・IR・新幹線対策特別委員会委員、予算決算委員会委員。

※お詫び：千住議員のみ、インタビューの音声データがうまく記録・保存できておらず、文字起こし、レポート掲載が叶いませんでした。この場を借りて、深くお詫び申し上げます。